

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K11850

研究課題名（和文）世界遺産登録が地域社会に及ぼす影響に関する事例研究 まなざしと再帰性から

研究課題名（英文）A case study on the impact of World Heritage registration on the local community: From the perspective of gaze and reflexivity

研究代表者

木下 征彦（KINOSHITA, Yukihiro）

日本大学・商学部・准教授

研究者番号：10440025

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、群馬県富岡市を事例として世界遺産登録が地域社会に及ぼす影響の実態を調査しつつ、その分析のための基本的な視点と方法を検討することをめざした。これまでの研究の結果、本事例においては世界遺産登録がもたらす地域社会への影響は限定的であることがわかった。観光客の増加やそれが引き起こした中心市街地の活性化などの現象は、限られた範囲のものであり、地域全体に影響を及ぼすものではない。他方、社会・文化的な側面においては、市民意識や地域文化への影響を見出すことができる。具体的には、地域社会と富岡製糸場の関係性の変化、「工女」や「シルク」など、地域の記憶や文化の表象化、市政における争点化などである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果の一つは、先行研究が取り組んできた観光や住民生活、経済効果といった個別的な側面のみならず、世界遺産登録の影響を地域社会の諸側面から包括的に捉えたことである。これは世界遺産研究や観光社会学の方法に新たな知見を加えるものであり、その点で、学術的な意義を見出せる。もう一つは、事例研究をつうじて世界遺産登録が地域社会に及ぼす影響を10年間にわたって継続的に調査したことである。その影響の範囲が限定的であるという事例研究の結果は、広く社会的に流布している世界遺産登録が地域の活性化につながるという言説を一般化することができないことを示した点で、社会的な意義があるといえる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to investigate the current situation of the World Heritage registration on the local community in the case of Tomioka City, Gunma Prefecture, and to examine the basic perspectives and methods for its analysis.

As a result of our research to date, we have found that in this case, the impact of the World Heritage registration on the local community is limited.

Phenomena such as the increase in tourists and the revitalization of the central city area that it has caused are limited in scope and do not affect the entire region. On the other hand, in terms of social and cultural aspects, we can find influences on civic awareness and local culture. For example, changes in the relationship between the local community and the Tomioka Silk Mill, the formation of local memories and representations of culture, such as "factory girl" and "silk," and the emergence of contentious new issues in the municipal administration.

研究分野：社会学

キーワード：地域社会 世界遺産 再帰性 観光 まなざし 観光社会学

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

世界遺産登録が地域社会に及ぼす影響を継続的に調査した研究は少ない。また、世界遺産登録は、観光や経済、生活文化や景観など地域の多様な側面の変化を促すものの、それらを包括的に捉えた研究成果も限られている。観光社会学では、観光と地域社会の関係について多数の理論研究と実証研究の成果が蓄積されているが、世界遺産と地域の関係に焦点を当てた研究は、その視点と方法において未だ発展途上といえる。そこで、本研究では申請者が世界遺産登録前から調査に取り組んできた群馬県富岡市を事例として、継続的かつ包括的な事例研究に取り組んだ。

2. 研究の目的

本研究の目的は、群馬県富岡市を事例として世界遺産登録が地域社会に及ぼす影響の実態を調査しつつ、その分析のための基本的な視点と方法を検討することである。より具体的には、富岡市に所在する富岡製糸場が国内 14 番目の世界文化遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」の主たる構成資産に登録されたことで、地域社会にどのような変化が生じたのかを調査する。また、観光社会学の研究成果を援用し、そうした変化を捉える分析枠組みの構築に向けた検討を行う。

3. 研究の方法

次の 3 つの作業目標を設定し、理論と実証の両面から調査研究を行った。

- (1) 富岡市における世界遺産登録の影響に関する継続的な実態調査
各種センサスのほか、市役所や企業や団体をもつ既存統計等のデータの収集・整理（行政関係者や地域住民等への聞き取り調査と資料収集、政策課題と成果の整理、その他データの収集）
観光客を対象とする調査票調査「世界遺産のまち・富岡 へのまなざしに関する調査」の実施
富岡市民を対象とする調査票調査「富岡製糸場の世界遺産登録 10 年とまちづくりに関するアンケート調査」の実施
- (2) 世界遺産登録の影響を測定するための基本的な視点と方法の検討
先行事例の収集・整理
「再帰性」と「まなざし」概念および分析枠組みについての理論的な検討
- (3) 富岡市における世界遺産登録がもたらす地域社会への影響に関する事例研究
富岡製糸場と地域社会の関係性を捉えるための歴史研究
世界遺産登録が地域社会に及ぼす影響を包括的に捉える説明モデルの検討

4. 研究成果

富岡市役所をはじめ、地域社会の協力を得ながら実態調査を進め、多角的なデータを収集・整理した。また、社会学的アプローチによる分析手法の検討を進め、富岡市における事例研究を通じて、多角的・包括的な視点から世界遺産登録が地域社会に及ぼす影響を明らかにするための基本的な視点と方法を検討した。

(1) 富岡市における世界遺産登録の影響に関する継続的な実態調査

研究期間全体を通じて、世界遺産登録前後の地域社会の変容を示す指標となりえる既存データの収集・整理を継続的に行った。申請者による過去の研究を含む比較可能なデータを収集しつつ、さらに「世界遺産・富岡製糸場」と「世界遺産のまち・富岡」に向けられる地域住民と観光客の「まなざし」をそれぞれ把握するための調査を行った。

既存データの収集・整理

量的データとしては、富岡製糸場の入場者数のほか、人口動態や経済関連の統計データ、流動人口や鉄道利用者数、事業所数、地価公示価格、新聞記事数、行政や関連団体が開催するイベント件数等の時系列データ、行政が実施した市民意識調査や観光客意識調査のデータなどを収集した。また、質的データの収集のため、地域のまちづくり関係者や地域住民に対する聞き取り調査と史料の収集を継続的に実施した。その他、富岡市における各種計画や予算書、議会会議録、行政や商工団体等の広報誌、関連団体によるイベント、観光協会によるキャンペーン等についても継続的にデータとして収集した。

観光客を対象とする調査票調査

富岡製糸場を訪れる観光客が「世界遺産のまち・富岡」に向け「まなざし」を捉え、その意識と行動を把握すること目的として「世界遺産のまち・富岡 へのまなざしに関する調査」を実施した。主な調査項目は、回答者の基本属性、訪問回数、滞在時間、観光の事前準備、情報源、観光満足度、再訪意向、紹介意向、まちの印象や要望等である。

富岡製糸場を訪問した観光客を対象として、2018 年 11 月に街頭面接法による調査票調査を実施し、2 日間で 366 票を回収した。

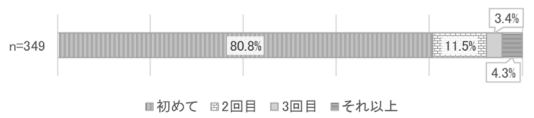


図1 訪問回数

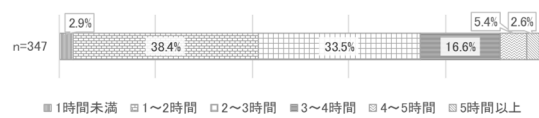


図2 まちなかでの滞在時間

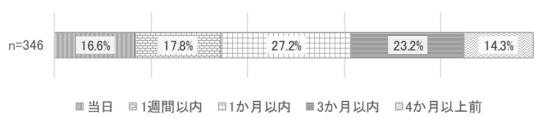


図3 旅行を計画した時期

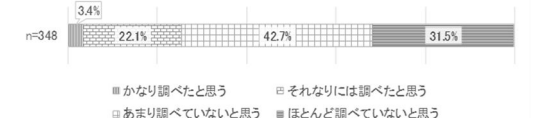


図4 旅行前の下調べの度合い

主な調査項目の集計結果をみると、回答者の8割が初めての富岡訪問であり（図1）およそ7割の回答者の滞在時間は3時間未満であった（図2）。旅行を計画した時期は比較的短い期間の回答が多く（図3）、旅行前に「かなり」または「それなりに」調べたという回答者の割合は3割未満であった（図4）。

また、5件法でたずねた総合満足度等の尺度平均値をみると、富岡での観光の総合満足度は3.93、親しい友人への紹介意向は2.03、1年以内の再訪意向は2.79であった。自由回答をみると、観光客の多くが富岡製糸場の歴史的・文化的な価値を評価しつつも、地域に対して観光面での充実を期待する声が見られる。また、富岡製糸場の周辺地域の景観・町並・雰囲気を好意的に評価する回答も見受けられた（日本大学商学部木下征彦研究室 2018）。

以上のことから、富岡市を訪れる観光客のまなざしは世界遺産・富岡製糸場のみならず、周辺地域にも向けられており、地域の日常の中に観光の非日常を求める、あるいは見出している様相が見てとれる。

富岡市民を対象とする調査票調査

富岡製糸場の世界遺産登録が地域社会にどのような影響を及ぼしたかを明らかにするために、「富岡製糸場の世界遺産登録10年とまちづくりに関するアンケート調査」を実施した。

主な調査項目は、基本属性、富岡製糸場についての関心や評価、地域社会に関する居住環境評価やコミュニティ意識、富岡市のまちづくりにおける政策への評価や目指すべき方向性、世界遺産の活用方法等である。富岡市選挙管理委員会の手続きに則って、富岡市の有権者を母集団とする1,200標本を抽出した後、世界遺産登録10周年を3か月後に控えた2024年3月に郵送調査を実施した。有効回答は516票であった（有効回答率43.0%）。

なお、本調査は当初計画では世界遺産登録5周年の2019年に実施する予定であったが、その年に発生した災害やコロナ禍等によって延期していた。研究期間の延長が承認されたことで世界遺産登録10周年の年に調査を行うことができた。調査結果の全体像をまとめた集計報告書は日本大学商学部木下研究室のWebページから公開予定であるが、本報告書では富岡製糸場の世界遺産登録の影響を回答者である市民がどのように捉えているかに焦点を当てて報告する。

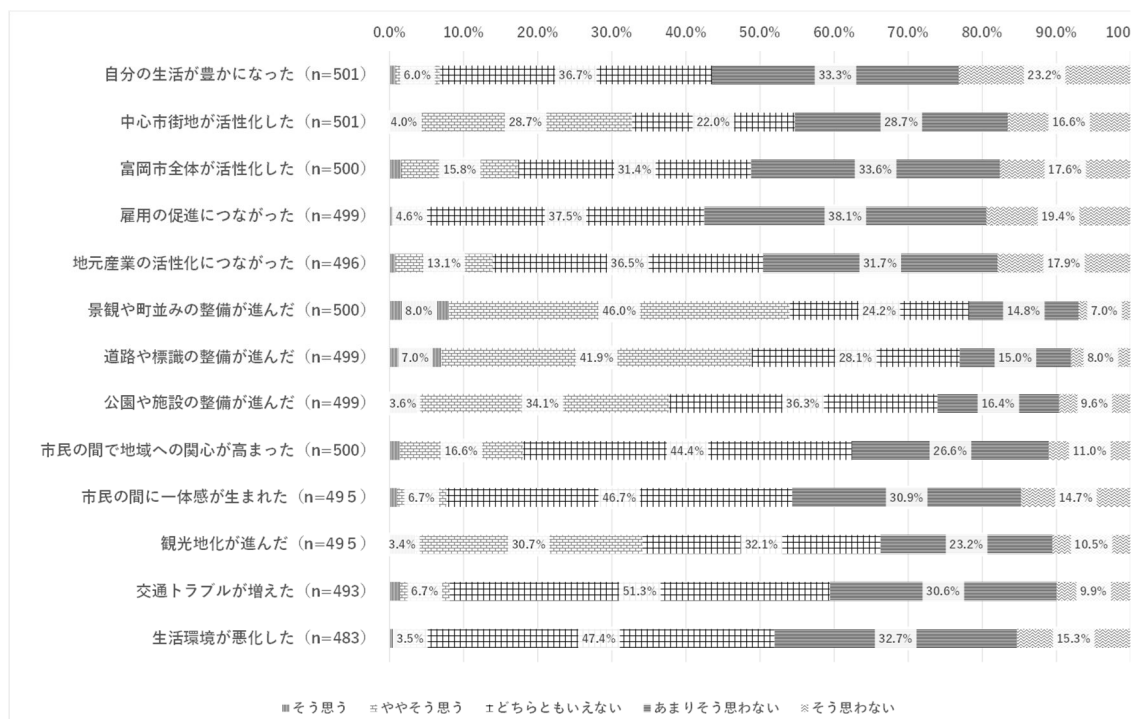


図5 世界遺産登録後10年間の変化

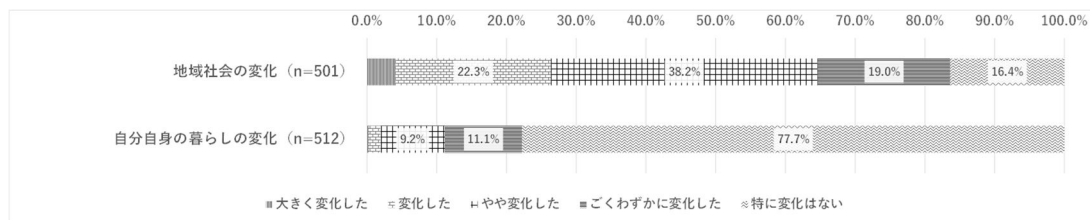


図6 地域社会の変化と自分自身の暮らしの変化

世界遺産登録後10年間の富岡市の諸側面における変化をたずねた質問群への回答をみると、回答者自身の生活の変化は、ほばないものと捉えられているが、中心市街地の活性化、富岡市全体の活性化、景観や町並みの整備、道路や標識の整備、公園や施設の整備などが地域の変化として捉えられている(図5)。また、地域社会の変化と自分自身の生活の変化の程度をたずねたところ、地域については程度の差はあれ「変化した」とする回答がおよそ8割を占めたが、自分自身の暮らしについては、ほば8割が「特に変化はない」という回答であった(図6)。

その他、先行する調査である群馬大学社会情報学部(2006)や高崎商科大学コミュニティ・パートナーシップ・センター(2016)との比較で時系列の変化をみると、富岡製糸場と市民の関係性の諸側面における変化が示唆される。これらの市民の意識や行動の変化については、今後さらなる詳細な分析に取り組み、後日発表する予定である。

(2) 世界遺産登録の影響を測定するための基本的な視点と方法の検討

先行事例の収集・整理

当初計画にのっとり、世界文化遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」が所在する島根県太田市と「紀伊山地の霊場と参詣道」が所在する和歌山県田辺市における世界遺産登録後の変化をめぐる議論やトピックを収集、整理した。当初計画した現地調査に代替して、文献や二次資料による調査としたが、先行事例における世界遺産登録前後の地域社会の変化や現状について、主に質的なデータを収集することができた。また現在、文化庁が世界文化遺産に推薦している「佐渡島(さど)の金山」が所在する新潟県佐渡市における世界遺産登録に向けた新潟県、佐渡市、関連団体等の動向について現地調査を行った。聞き取り調査と資料収集を行い、行政や関連団体の計画や地域住民の意識等、本研究の分析枠組みの検討に資するデータを収集することができた。

概念および分析枠組みについての理論的な検討

主に文献を用いた理論研究を中心として、観光社会学における「再帰性(Reflexivity)」と「まなざし(Gaze)」の概念を中心に世界遺産登録がもたらす地域社会への「影響」を測定する分析枠組みを検討した。さらに、世界遺産登録が地域社会に及ぼす影響を相対的に捉えるため、で収集した諸データを用いた分析枠組みと指標の検討を行った。観光客と地域住民の「まなざし(Gaze)」の相互作用を捉える視点を踏まえつつ、世界遺産登録および観光を説明変数として地域を分析する枠組みを検討した。なお、これらの成果は上記の成果と併せて現在、分析中であり、今後順次発表していく予定である。

(3) 富岡市における世界遺産登録がもたらす地域社会への影響に関する事例分析

富岡製糸場と地域社会の関係性を捉えるための歴史研究

世界遺産登録前後の地域社会の変化を長期的な視点で捉えるべく、富岡製糸場と地域社会の関係性を掘り下げる調査研究に取り組んだ。具体的には、地域社会において、いつ、誰が、富岡製糸場の何を、どのように評価して世界遺産にまで至らしめたのかについて、現地での継続的な聞き取り調査と文献研究を実施した。かつて地域社会においてその価値評価が定まらなかった歴史遺産だった富岡製糸場が文化財として社会的に評価され、さらに地域資源として活用されるに至る長期的なプロセスを記述・分析した。その成果の一部は、木下(2023)として論文を発表したほか、2023年6月の総合社会科学会第24回研究大会と同9月に開催された地域活性学会第15回研究大会で、それぞれ報告した。

世界遺産登録が地域社会に及ぼす影響を包括的に捉える説明モデルの検討

上述の諸データを用いて、富岡市において富岡製糸場の世界遺産登録が地域社会に及ぼす影響について多角的な検討を行った。この分析は現在も継続中であり、その完了後に分析枠組みと説明モデルを発表する予定である。現在までの研究の結果、本事例においては世界遺産登録がもたらす地域社会への影響は限定的であることがわかった。たとえば観光客の増加と観光化の進展、それにとまなう都市空間の変容や市街地の活性化は富岡製糸場周辺を中心市街地に限られて生じている現象であり、地域全体に影響を及ぼすものではない。他方、社会・文化的な側面に目を向けると、市民意識や地域文化への影響を見出すことができる。具体的には、地域

社会と富岡市製糸場の関係性の変化、「工女」や「シルク」など、地域の記憶や歴史、文化の表象化、市政における争点化などである。これらについては、順次研究成果を論文等の形で発表する予定である。

(3)今後の展望

本研究は当初 2018 年度から 2020 年度までの 3 年間の計画であったが、災害やコロナ禍等の事情により、研究期間を 2024 年度まで延長した。その結果として、世界遺産登録から 10 年を経た地域社会の変化の度合いとその様相を当初計画よりも広く深く捉えることができた。ただし、その関係で一部のデータについてはより詳細な分析が必要となり、今後、継続して取り組んでいく。その結果を用いつつ、未公表であった理論的な研究の成果や実証研究のための諸指標や分析枠組みについても、順次発表する予定である。

<引用文献>

- 群馬大学社会情報学部，2006，『旧官営富岡製糸場の世界遺産登録とまちづくりに関する富岡市民意識調査報告書』フィールドミュージアム「21 世紀のシルクカントリー群馬」推進委員会。
- 木下征彦，2018，「世界遺産とコミュニティに関する一考察 富岡製糸場を事例として」『公共研究』14（1），149-176。
- 木下征彦，2023，「地域社会における 歴史遺産 に対する評価の変遷 富岡製糸場の世界遺産登録運動を事例として」『総合文化研究』28（2-3），1-28。
- 日本大学商学部木下征彦研究室，2018，『世界遺産のまち・富岡 へのまなざしに関する調査集計報告書』日本大学商学部木下征彦研究室
- 高崎商科大学コミュニティ・パートナーシップ・センター，2016，『高崎商科大学「地（知）の拠点」整備事業 地域課題研究プロジェクト/地域資源研究プロジェクト 富岡地域研究報告書』高崎商科大学コミュニティ・パートナーシップ・センター。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 木下征彦	4. 巻 28(2-3)
2. 論文標題 地域社会における 歴史遺産 に対する評価の変遷 富岡製糸場の世界遺産登録運動を事例として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 総合文化研究	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 木下征彦
2. 発表標題 世界遺産登録が地域社会に及ぼす影響に関する事例研究
3. 学会等名 地域活性学会 第11回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木下征彦
2. 発表標題 地域社会における 歴史遺産 の資源化に関する事例研究 富岡製糸場を事例として
3. 学会等名 地域活性学会 第15回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 木下征彦
2. 発表標題 地域社会における富岡製糸場の位置づけと価値評価の変遷 共同性と公共性の観点から
3. 学会等名 総合社会科学会 第24回研究大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

日本大学商学部木下征彦ゼミナール(木下征彦研究室研究成果公開用サイト)
<https://kn942official.wixsite.com/kinosemi/blog>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------